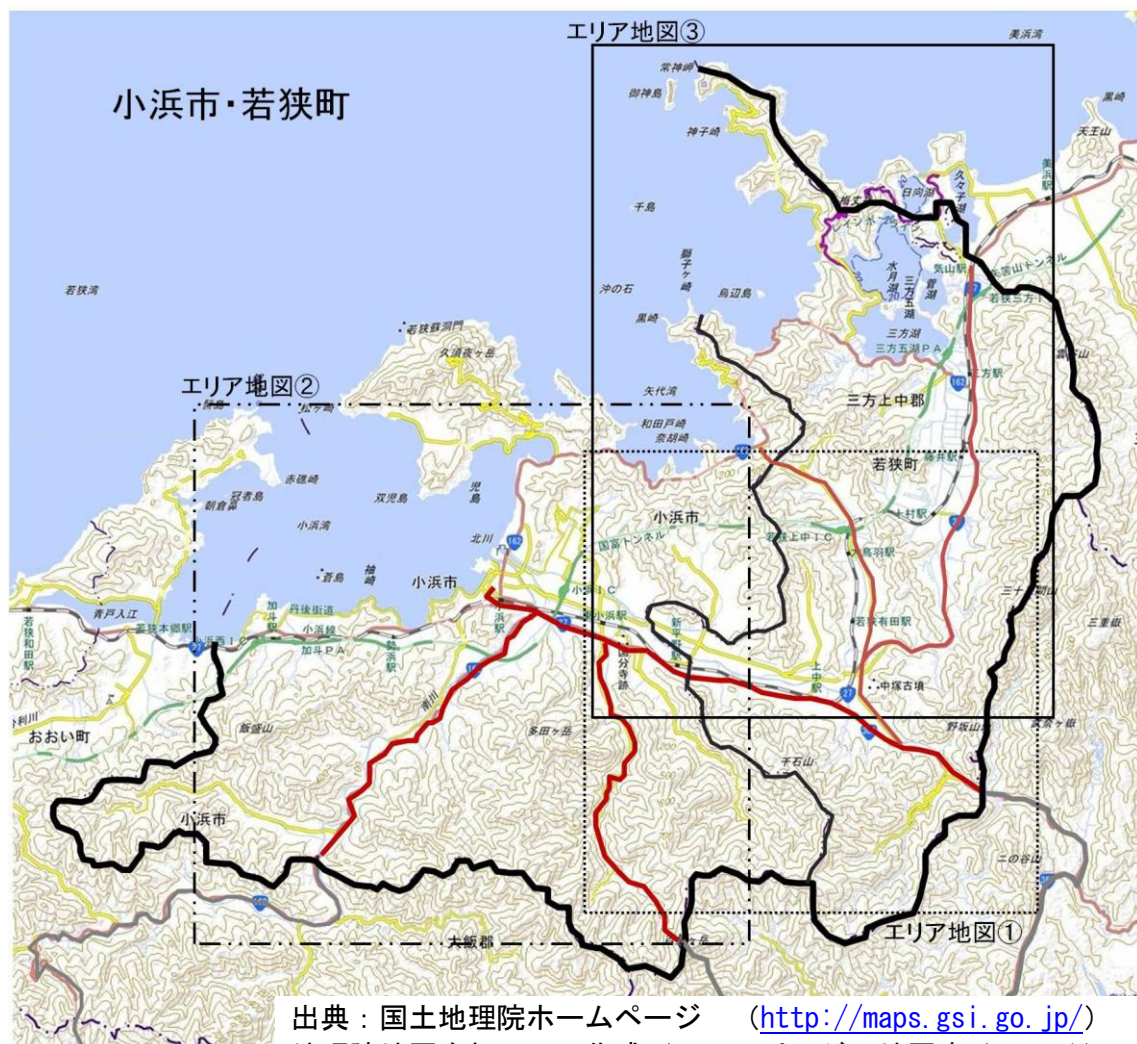


① 申請者	◎福井県 (小浜市、若狭町)	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群 ～御食国（みけつくに）若狭と鯖街道～			
④ ストーリーの概要（200字程度）			
<p>若狭は、古代から「御食国」として塩や海産物など豊富な食材を都に運び、都の食文化を支えてきた地である。</p> <p>また、大陸からつながる海の道と都へとつながる陸の道が結節する最大の拠点となった地であり、古代から続く往来の歴史の中で、街道沿いには港、城下町、宿場町が栄え、また往来によりもたらされた祭礼、芸能、仏教文化が街道沿いから農漁村にまで広く伝播し、独自の発展を遂げた。</p> <p>近年「鯖街道」と呼ばれるこの街道群沿いには、往時の賑わいを伝える町並みとともに、豊かな自然や、受け継がれてきた食や祭礼など様々な文化が今も息づいている。</p>			
⑤ 担当者連絡先			
担当者氏名	福井県観光営業部文化振興課景観づくりグループ 酒井千恵子		
電 話	(0776) 20-0572	FAX	(0776) 20-0661
E-mail	c-sakai-1v@pref.fukui.lg.jp		
住 所	福井県福井市大手3丁目17-1		

市町村の位置図（地図等）



出典：国土地理院ホームページ (<http://maps.gsi.go.jp/>)  
地理院地図を加工して作成（以下のページの地図すべて同じ）



構成文化財の位置図（地図等）











#### 4 熊川宿 拡大図





## 小浜市中心部 拡大図



## ストーリー

## 海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群 ～御食国（みけつくに）若狭と鯖街道～

日本海にのぞみ、豊かな自然に恵まれた若狭は、古代、海産物や塩など豊富な食材を都に送り、朝廷の食を支えた「御食国」のひとつであり、御食国の時代以降も「若狭の美物（うましもの）」を都に運び、京の食文化を支えてきた。近年「鯖街道」と呼ばれる若狭と都をつなぐ街道群は、食材だけでなく、様々な物資や人、文化を運ぶ交流の道であった。朝廷や貴族との結びつきから始まった都との交流は、「鯖街道」の往来を通じて、市民生活と結びつき、街道沿いに社寺・町並み・民俗文化財などによる全国的にも稀有なほど多彩で密度の高い往来文化遺産群を形成した。

「鯖街道」をたどれば、古代から現在にかけて1500年続く往来の歴史と、伝統を守り伝える人々の営みを肌で感じることができる。

## 若狭街道 ―御食国若狭の原点と鯖街道のメインルート―

若狭と畿内を結んだ街道、いわゆる鯖街道のうち、最大の物流量を誇った若狭街道沿いには、古代の首長墳墓群から近世の宿場町まで、御食国若狭と鯖街道を代表する文化財が点在している。

若狭は古墳時代、宮中の食膳を司る膳臣（かしわでのおみ）が治めた国であるといわれ、「御贄」や「御調塩」を都に貢納する御食国のひとつであった。膳臣一族の奥都城とされる脇袋古墳群をはじめとする古墳群は近江国との国境に源流を持つ北川沿いに築かれており、北川沿いに開発された若狭街道では、古墳群に囲まれるように都との往来が脈々と行われている。

若狭街道は軍事上も大きな役割を果たしており、戦国時代には、織田信長が豊臣秀吉や徳川家康を引き連れ、この街道から越前朝倉攻めに向かった。後の天下人たちが意気揚々と通った出世街道ともいえる道である。

近世中期以降、街道最大の中継地となった熊川宿では問屋たちが、小浜の仲買が送り出した大量の物資を馬借や背負に取り次ぎ、京都などに運ばせた。一日千頭の牛馬が通ったとも言われる宿場町は馬借や背負で大いに賑わった。現在も塗り壁の商家や土蔵など多数の伝統的建造物がのこる旧街道筋では、神社の祭りには豪勢な山車が繰り出し、盆には京都から伝わった盆踊りが踊られるなど当時の宿場の賑わいを伝えている。



重要伝統的建造物群保存地区若狭町熊川宿

街道沿いの集落には道標や街道松などの遺物が点在するほか、六斎念仏や祇園祭、地蔵盆など京都伝来の民俗行事が守り伝えられており、街道の歴史的景観を彩っている。

## 鯖街道の起点 ―湊町・小浜の賑わい―

街道の起点である湊町・小浜は、海外や日本海沿岸各地とつながる「海の道」と、都とつながる「陸の道」の結節点として、様々な物資や人、文化が集まる一大港湾都市であった。室町初期には象やクジャクなど珍奇な動物を積んだ南蛮船が日本で初めて上陸し、京都までの街道をひと月かけて運ばれた珍獣たちは、人々を大いに驚かせたという。



初めて象が来た港の図(小浜市蔵)

大きな交易利得を誇った小浜湊は、中世には禁裏御料所ともなっており、宮中や都と間に深いつながりを持っていた。歴代の国主や廻船業で栄えた豪商たちのもと、津軽十三湊の安倍氏など北方交易の人々も加わり、国内外との盛んな交易や文化交流が展開されていた。

近世初頭には、小浜藩主京極高次によって小浜市場が整備され、流通の一大拠点が発達した。「鯖街



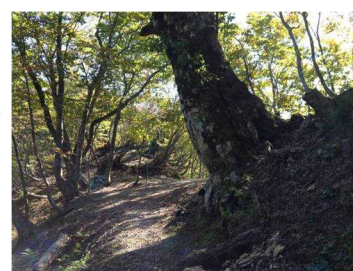
道」という通称は、この市場の記録「市場仲買文書」に残る「生鯖塩して担い京に行き仕る」という一文に由来するといわれる。「一塩」された若狭の海産物は、京都に運ばれ「若狭もの」、「若狭一汐」として珍重され、今に至っている。

この地域には、廻船問屋の豪奢な邸宅・庭園や、桃山時代の世界図及日本図屏風、南蛮渡来の工芸技術に倣って発展した若狭塗などが伝わっているほか、近世の商人町・小浜西組を中心とする城下町では、京都祇園祭の系譜をひく小浜放生祭の華やかな山車や芸能が繰り広げられ、南蛮貿易や日本海交易で繁栄した湊町・小浜の雰囲気は今に伝えている。

### 針畑越え ー最古の鯖街道の歴史的景観ー

最大の物流量を誇った若狭街道に対し、古代、若狭国府が置かれた遠敷の里から、針畑峠を越えて朽木を経由し、京都鞍馬に向かう針畑越えの道は、険しい道のりではあるが若狭と京都を結ぶ最短ルートとして盛んに利用された。

若狭人たちは、一塩した鯖を背負い、「京は遠ても十八里」、京都まで遠いとはいってもせいぜい十八里（7.2キロ）と言いながら、急峻な峠をせつせと越えていったという。ブナ林が広がる近江との国境・上根来の山中には、かつて峠を行きかかった人々の足跡によって深くえぐられた山道が続く、山道に残された石積みの井戸や地蔵などが、旧街道の風情を色濃く示している。



針畑峠付近

また、この道には、峠を越えて若狭にやってきた兄弟神、海彦・山彦の伝説が語り継がれおり「一番古い鯖街道」とも言われている。峠を越えて先に若狭に鎮座した弟神は、街道沿いの若狭彦神社に奉られ、遠敷の神様が東大寺二月堂の創建に際して若狭の水を送ったという伝説にちなんだ神事、お水送しも現在に伝わっている。街道沿いにはお水送りをを行う若狭神宮寺のほか、若狭国分寺や多田寺、明通寺など、天皇や貴族に庇護された、創建を古代に遡る古刹・仏像が集積しており、奈良・京都とのつながりを色濃く示す歴史的景観を形成している。

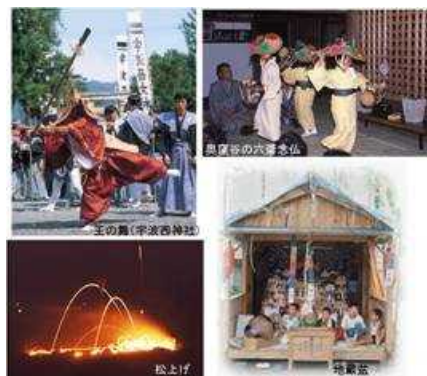
### 若狭の浦々に続く鯖街道 ー都の祭りや伝統を守り伝える集落ー

中世、湊町として栄えた気山から若狭街道までを結ぶ丹後街道や、古くから廻船や漁業で栄えていた田烏浦から若狭街道へと抜ける鳥羽谷もまた、諸国から運ばれた物資や、若狭湾や三方五湖の幸を熊川経由で都に運んでいる。田烏をはじめとする若狭の浦々では、豊富にとれた鯖などの海産物を長期食用するために発達した「へしこ」や「なれずし」などの加工技術が、街道の歴史の中ではぐくまれ、独特の食文化として今も生きている。

これらの街道沿いの集落には、王の舞や六斎念仏など都から伝わった民俗行事が数多く残っており、それぞれ集落ごとの特色を加えながら守り伝えられている。王の舞の多くは4月初旬から5月にかけて行われ、若狭の春の風物詩として親しまれている。

小浜から南川沿いに南下し、京都にいたる周山街道沿いの集落では京都の愛宕神をまつる火伏せの祭り松上げが行われており、次々に投げ上げられる松明の炎が若狭の夏の終わりを彩っている。

都との往来を通じてもたらされ、若狭に広く根付いた民俗行事は、現在も四季折々に行われ、若狭独特の歴史的景観を形成している。



ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ(※3)	文化財の 所在地 (※4)
	若狭街道 御食国若狭の原点と鯖街道のメインルート			
1	かみなかこふんぐん 上中古墳群	国史跡 他	<p>若狭町上中地域に所在する古墳群の総称。北川に沿って、脇袋古墳群、天徳寺古墳群、日笠古墳群と3つの首長古墳群を形成する他、北川の支流である鳥羽川流域にも首長に準じる規模の古墳が分布している。西塚古墳からは朝鮮半島との交流を示す副葬品が出土している。</p> <p>首長墳については、前方後円墳及び大型円墳の形態をとり、奈良時代、若狭を支配した膳臣(かしわでのおみ)一族が被葬者であると推定されている。膳臣は天皇の食を司る役を担った一族であり、御食国の原点を示す史跡。</p> <p><u>脇袋古墳群</u> 西塚古墳(国史跡)、上ノ塚古墳(国史跡)、中塚古墳(国史跡)からなる。古墳群の背後に膳部山があり、膳臣との関係がうかがえる。また、膳部山上には、地元料飲業者が昭和60年「<u>膳神社</u>」を建立。</p> <p><u>天徳寺古墳群</u> 十善の森古墳(県史跡)、丸山塚古墳(町史跡)からなる。</p> <p><u>日笠古墳群</u> 上船塚古墳(国史跡)、下船塚古墳(国史跡)、白鬚神社古墳(市史跡)からなる。</p> <p>その他、向山古墳群・大谷古墳(町史跡)・城山古墳(町史跡)など。</p>	若狭町 小浜市
2	おこづせいえんいせき 岡津製塩遺跡	国史跡	<p>若狭の海岸では土器に海水を入れ、煮詰めて塩を生産した製塩遺跡が多数確認されている。平城京からは若狭の調塩の木簡が数多く発見されており、奈良時代、若狭は重要な塩の供給地であったことを示している。岡津製塩遺跡の土器は大型で、大量の塩が官営工房で生産されていたことが推定されている。</p>	小浜市
3	鯖街道(若狭街道)	未指定 (史跡)	<p>若狭と京都をつないだ主街道、いわゆる「鯖街道」のうち最も物流量が多かったとされるメインルート。小浜市場を出た大量の物資は、熊川宿の間屋に一手に中継され、朽木、大原を経て京都出町柳に運ばれた。街道松や道標など、街道の風情を伝える遺物が点在している。</p> <p><u>道しるべ(日笠、三宅)</u>(町指定(史跡)) 若狭街道と敦賀道(丹後街道)の分岐点の日笠、若狭街道沿線の三宅集落にある江戸時代の石造物</p>	小浜市 若狭町



4	くまがわじゆく 熊川 宿	国重伝建	<p>若狭街道ルート of 物流の中継拠点。近江国との国境に接し、軍事上、物流上の要衝として重要な役割を担った宿場町。秀吉から若狭国を与えられた浅野長政が関所を置き、天正 17 年(1589)に諸役免除の判物を出して商家を集め、問屋街と宿場を整備し、近世的な宿場町として発展する礎を作った。小浜市場と連携した問屋が、馬借や背負を手配し、小浜港に揚がった諸藩の蔵米や、昆布、鯿などを京都に運ぶ中継地として活況をみせた。</p> <p>現在の熊川の旧街道筋には、塗り壁の商家や土蔵など多数の伝統的建造物が保存され、当時の宿場の賑わいを伝えている。</p> <p><u>おぎの 荻野家住宅(国重文(建造物))</u> 屋号を倉見屋と号し、代々人馬継立の運送業を行う問屋を営んでいた。主屋は熊川宿最古の町屋であり、主屋に隣接して街道に面して建つ荷蔵など、物流で栄えた熊川宿の中核であった問屋の姿をよく表している。</p> <p><u>へんみ 旧逸見勘兵衛家住宅(町指定(建造物))</u> 熊川村初代村長逸見勘兵衛の住居跡。造り酒屋を営んでいた主屋と文庫蔵からなる。江戸時代末期に建てられた伝統的な町屋の外観は当時の宿場町の風情をよく伝えている。</p> <p><u>熊川番所(町指定(建造物))</u> 熊川宿の南端(近江寄り)に設けられていた番所を復元した建造物。関所として「入鉄砲出女」に対する厳しい統制と物資への課税が行われていた。</p> <p><u>とくほうじ 得法寺(未指定(史跡))</u> 室町時代にこの地の領主であった沼田氏の菩提寺。元亀元年(1570)越前朝倉攻めに際し、信長に従っていた徳川家康は得法寺に宿泊、境内には「家康腰かけの松」が残る。鯖街道が軍事上も重要な役割を果たしていたことを示す。</p> <p><u>白石神社(未指定(史跡))</u> 5月3日に行われる祭礼では京都祇園祭を模した豪華な見送幕(県指定)を具えた山車が巡行し、かつて熊川宿を賑わした京の華やかな文化を感じさせる。</p> <p><u>おくらみち 御蔵道(未指定(史跡))</u> 江戸時代初期以降、熊川から小浜へ流れる北川を使った水運の開発が幾度かなされた。小浜から北川を遡って運ばれてきた藩米を、小浜藩の蔵屋敷に運ぶために使われた道。</p> <p><u>てっせん踊り(未指定(無形民俗))</u> 京都の八瀬大原から熊川に伝わったといわれる民踊で大正初めころまで踊られていた。平成 9 年(1997)、熊川地区住民が、この踊りを伝えてい</p>	若狭町
---	-----------------	------	---	-----

			<p>た京都「一乗寺郷土芸能保存会」との交流を始め、翌年、熊川でも80年ぶりに復活させた。鯖街道を通じて若狭に伝わり、根付いた文化のひとつで、熊川で途絶えたものが再び街道を通じた文化交流により復活した。</p> <p><u>熊川葛の製作技法(未指定(工芸技術))</u> 熊川葛は古くは17世紀ころから京都で売買されていた。良質な葛として江戸時代の儒学者頼山陽にも讃えられた。純度の高い熊川葛は谷川で寒ざらしされる。その技術は地元の振興会により、伝え続けられている。</p>	
5	みやけ 三宅の火の見やぐら、 火の見やぐら倉庫	国登録 (建造物)	<p>旧若狭街道沿いの三宅地区の集落にある江戸時代の建造物。愛宕神社は京都の愛宕山上にあり、火除けの神として街道沿線各地に勧請された。内部は愛宕地蔵をまつる地蔵堂が置かれ、街道沿いの農村の火伏信仰と日常生活を感じさせる。</p>	若狭町
6	瓜割の滝	町指定 (名勝)	<p>旧若狭街道沿いの天徳寺境内奥の湧水から生ずる滝。周辺は「水の森」と呼ばれ、夏でもこんこんとわき出し、旅人の渇きを潤している。また、古くから修験者の修行地として神聖な地とされ、不動明王像(鎌倉時代・若狭町指定)が祀られている。</p>	若狭町
	鯖街道の起点 湊町・小浜			
7	おばまにしぐみ 小浜西組	国重伝建	<p>小浜市場の西側は、寺町、商家町、茶屋町として整備された。近世前期の古い町割りに伝統的建築物や文化財が数多く残る地区。南蛮貿易と日本海交易で繁栄した港町・小浜の賑わいを伝える。</p> <p><u>旧料亭酔月(未指定(建造物))</u> 明治初期に建てられた料亭。茶屋町の中核的な料亭として存続した茶屋町の代表的な家屋。</p> <p><u>旧料亭蓬嶋楼(未指定(建造物))</u> 明治初期に建てられた料亭。酔月とともに、小浜西組の茶屋町の代表的な伝統的建造物。</p> <p><u>旧旭座(市指定(建造物))</u> 港町として栄えた小浜には数多くの能舞台や芝居小屋があり、能・狂言、芝居興行が行われていた。西組の商家町に建てられた旭座はその一つで、明治後期の建築。</p>	小浜市



8	おぼまいちば 小浜市場	未指定 (伝建)	<p>慶長 12 年(1607)に若狭国守護京極高次が湿地を埋め立てて市場として開発整備し、鯖街道の起点となった。海産物の集荷業者や問屋、加工、小売業者等の商業関係者や廻運業者などによる商人町が形成されていた。背後の南川河口には廻船・漁船の係留所が設けられ、ここで水揚げされた物資や魚介類は若狭街道を經由して京都に運ばれた。</p> <p>江戸時代初期から明治時代の記録「市場仲買文書」には「生鯖塩して担い京へ行き仕る」との記載があつて「鯖街道」を象徴する記録となっている。現在も、上市場・下市場・狭市場の名称が残され、かつて石敷きであつた幅の広い通路を囲むように問屋や商家が残り、市恵比寿神社が中央にあり、古くは市の塔(県指定)(小浜市和久里)もここにあつた。</p>	小浜市
9	のちせやまじょうあと 後瀬山 城 跡・同館跡	国史跡	<p>海に面し、山裾には丹後街道が走る要害の地に築かれた後瀬山城は、大永二年(1522)、若狭守護武田元光が築城し、京極高次による小浜城築城が開始されるまでの約 80 年間、歴代若狭国主の城であつた。</p> <p>若狭武田氏は応仁・文明の乱までは、京都に居住し、室町幕府を支えるとともに、都の一流の文化人・公家たちと交流し、和歌・連歌などの文芸をたしなんでいた。元光が後瀬山に築城し、若狭に常住するようになってからは、都の戦乱を避けた文化人たちが、武田氏を頼って多く若狭を訪れた。館では都の連歌師を迎えてしばしば連歌会が行われた。</p> <p>室町時代末期の連歌師・里村紹巴の若狭を訪れた際の紀行文には、紹巴が朽木、熊川を経て街道をたどって小浜に入り、武田館にて 7 代目信豊・松の丸に面会したという記事が記載されている。街道を通じて若狭に入ってきた都の洗練された文化は後瀬山城に集い、若狭に文芸の花を開かせた。</p>	小浜市
10	きゅうふるかわやべつてい ていえん 旧 古河屋別邸、庭園	県指定 (建造物)	<p>近世、小浜の廻船問屋として栄えた豪商・古河屋の別邸。松前の海産物や東北・北陸の米等を小浜へ、そして京阪へ集散する廻船問屋を本業とし、酒・醤油の醸造、金融業を兼業し、藩の御用達をつとめた豪商であつた。</p> <p>藩主のお成りのために造られた庭園とその庭を広く見せるために緑の角にあるべき柱が取除かれているなど、高度な建築様式で建てられており、日本海交易の物流拠点・小浜湊の繁栄ぶりを今日に伝える。</p>	小浜市
11	せかいおよびにほんず 世界及日本図 はちきよくびょうぶ 八 曲 屏 風	国重文 (歴史資料)	<p>桃山時代、南蛮人が請来した地図をもとに描かれたものと考えられる。旧小浜の廻船問屋として栄えた豪商の家に伝来したもので、世界に開かれた湊として繁栄した小浜を象徴する文化財。</p>	小浜市

1 2	小浜の <small>ぎおんさいれい</small> 祇園祭礼群	県無形民俗 他	<p>江戸時代、湊町の繁栄を祈り、京都祇園祭礼をまねて、小浜城下で始まった都市型祭礼。棒振り、神楽、獅子舞などの演し物は広く若狭各地で行われており、京都から伝わり、小浜の町衆の手で洗練・発展された芸能は、周辺農漁村にも伝わり、広く伝承されている。</p> <p><small>おばまほうぜまつり</small> <u>小浜放生 祭</u> (県無形民俗) 若狭地方最大の秋祭り。棒振り大太鼓・神楽太鼓・三匹獅子舞・山車など華やかな出し物が繰り出す。江戸時代、廣嶺神社の祇園祭の練物行列の出し物が八幡神社の放生祭に移り、現在に至っている。</p> <p><small>ひろみね</small> <u>廣嶺神社の祇園祭</u> (市無形民俗) 500年以上続くとされ、神輿のほか、他の祭礼ではあまり見ることもない、障子鉾や鎌鉾がでる。鎌鉾は鎌倉時代の京都祇園祭にも出ていたといわれる。廣嶺神社には江戸時代の祇園祭の祭礼行列を描いた<u>小浜祇園祭礼絵巻</u> (市有形民俗) が伝わり、城下町・湊町として繁栄した小浜の町人たちの経済力を背景に発展した祭礼の華やかさ、趣向の面白さを知ることができる。</p> <p><u>お城祭り</u> (未指定(無形民俗)) 小浜藩祖酒井忠勝を祀る小浜神社の例祭。廣嶺神社の祇園祭の練物行列に出ていた<small>うんびんじし</small>雲浜獅子 (県無形民俗) や棒振り大太鼓、神輿などが繰り出す。</p> <p><small>にしづしちねんまつり</small> <u>西津七年 祭</u> (県無形民俗) 古代末期から港として発達したとされる西津地区に伝わる祇園祭礼の流れを汲む祭。神輿の巡幸、棒振り大太鼓、神楽太鼓、太刀振りなどの都市型芸能に加え、漁師町西津らしく、船形模型の巡行など海に根差した祭礼が守り伝えられている。</p>	小浜市
1 3	<small>わく り み ぶきょうげん</small> 和久里壬生狂言	国選択	<p>京都壬生寺の壬生大念仏狂言の流れを汲む無言の仮面劇。小浜城下町の市場近くに置かれた「市の塔」と呼ばれる宝篋印塔の供養のために始まったといわれる。現在は市の塔が移された和久里地区<small>さいほうじ</small>西方寺で7年に一度行われる。</p>	小浜市
1 4	<small>わかさぬり</small> 若狭塗	未指定 (工芸技術)	<p>若狭塗は、慶長年間(1596～1614)、小浜の豪商組屋六郎左エ衛門が国外より入手した色漆塗の盆(若狭盆)を城下の塗師松浦三十郎が模して製作したことに始まった。最初は菊塵塗とも呼ばれた。これに改良工夫を重ねて卵殻・研ぎ出しの技法が完成され、藩主が「若狭塗」と命名して、小浜藩の基幹産業として奨励し職人を保護した。江戸初期に青森県弘前市に職人が移住し津軽塗の技術改良を行った記録が弘前にある。明治時代以降は、和食文化の基礎ともいえる塗箸の生産が主流となり、国内シェアのほとんどを若狭塗箸が占めている。</p>	小浜市



15	はがじ 羽賀寺	未指定 (史跡)	<p>霊亀 2 年(716)、元正天皇の勅命で行基が創建したと伝えられる真言宗寺院。</p> <p>本堂(国重文)は、室町中期二度の火災に遭ったが、御花園天皇の勅命を受けて奥州十三湊の日本将軍安倍康季が再建。東北との北方交易に伴い、政治・文化面での交流も行われていた。元正天皇の御姿を写したとされる本尊木造十一面観音立像(国重文(彫刻))や、羽賀寺を長く保護した津軽安倍氏との関係を伝える木造安倍愛季・秋田実季坐像(県有形(歴史資料))などが伝わる。</p>	小浜市
16	ほんきょうじ 本境寺	未指定 (史跡)	<p>本境寺は、中世小浜の廻船問屋 組屋(組氏)と鼠屋(関戸氏)が大壇越となって創建された寺院である。男鹿の豪族安東愛季の代官となった関戸氏がこの寺を宿所として北方の産物を都へ運び入れ、若狭守護職武田信豊へも戸館馬(青森産馬)を献上している。応仁の乱の時には京都の本山の疎開寺院として考慮された山号が付けられており、寺伝来の仏画は日蓮宗文化財として都にもない貴重な絵画となっている。都との深い関係と中世日本海交易を地で行く寺院である。</p>	小浜市
	はりはた 針畑越え 最古の鯖街道の歴史的 景観			
17	はりはた 鯖街道(針畑越え)	未指定 (史跡)	<p>鯖街道のうち最も古いといわれるルート。この峠は、根来坂とも呼ばれ朽木の針畑へ超え、京都の大原経由で洛中へ入った。遠敷から若狭彦神社、神宮寺、鵜の瀬を経て、上根来集落から針畑峠に向かう古道が続く。戦国時代、越前朝倉攻略の際、徳川家康はこの峠道を越えて京に戻った。ブナ、トチノキなど夏緑広葉樹林が広がる山中には、都からやってきた神々の伝説が残るゴザ岩や、石積みの井戸や苔むした地蔵など、かつて峠を行きかかった人々の気配が感じられる古道景観が残る。標高は高いが、都直結の最短ルートとして盛んに利用された。</p>	小浜市
18	かみねごりしゅうらく 上根来集落	未指定 (伝建)	<p>北近江と若狭の国境に接し、遠敷谷の最奥 300 メートルの山腹斜面に形成された集落。茅葺屋根の民家や稲木が残る。針畑越えの登山口となっており、江戸時代には街道の背負の取次を行っていた。</p>	小浜市
19	おにゅう まちな 遠敷の町並み	未指定 (伝建)	<p>若狭街道と根来道の分岐点に広がる町並み。古代には郡家が置かれ、都への御贄や調塩を送り出した。若狭姫神社(かつての遠敷明神)の門前町として建武元年(1334)には遠敷市場が開設され、熊川以前に物流の拠点となっていた。付近には国分寺や国府跡などがあるかつての若狭国の中心地であり、交通の要衝であった。</p> <p>江戸時代中頃には北前船で運ばれた北海道・東北の瑠璃石の加工が盛んに行われ、遠敷</p>	小浜市

			<p>で加工された若狭メノウは京都や大阪に大量に出荷された。</p> <p>現在、若狭姫神社の門前沿いと丹後街道沿いには明治以降の伝統的な町屋が建ち並び、若狭彦神社、姫神社の例祭遠敷祭には氏子住民による棒振り太鼓や神楽太鼓が繰り出す。</p>	
20	みずおく お水送り	未指定 (無形民俗)	<p>遠敷明神が東大寺二月堂の開創法要に遅れ、行法に感激して若狭の水を送ったという伝説にちなみ、毎年3月2日に神宮寺の閼伽井で汲んだ水を鵜の瀬から流す儀式。この水が10日後の3月12日、二月堂の脇にある若狭井から汲み上げられ本尊に香水として供えられる。若狭と奈良の深い関係や、若狭の水の神聖さを示す行事。</p>	小浜市
21	遠敷の里の 古代中世の社寺・仏像群	国史跡 他	<p>「最も古い鯖街道」と呼ばれる街道沿いの遠敷地域には、峠を越えて若狭に降り立った若狭彦神を祀る若狭彦神社をはじめ、奈良時代に天皇の勅願で建立された寺院など、創建を古代に遡る社寺が多数集積しており、奈良や京都とのつながりを色濃く残す歴史的景観を形成している。</p> <p>わかさひこじんじゃ わかさのくにいちのみや かみしや <u>若狭彦神社(若狭国一宮・上社)</u>(県有形(建造物)) 奈良時代に小浜市下根来の白石に垂迹した若狭彦(比古)神を祀る。この神社は古代に若狭国総統治のために迎えられ、若狭国総鎮守社となり後年一宮となった。祭神はひこほでみこと <u>彦火々出見尊</u>。所蔵する<u>詔戸次第(国重文)</u>には、若狭国へ赴任する国守(若狭守)が京の都から遠敷までの路程を詠んだ「山途申次第」があり、都から近江国(湖西)を経て若狭に入る道筋や景色が記録されている。</p> <p>りゅうぜんく <u>竜前区 銅造薬師如来立像(国重文(彫刻))</u> かつて若狭彦神社の神仏習合の本地仏として神社の境内に奉られていた仏像。鎌倉時代の宝治2年(1248)に造られた。優れた鑄造技術により造られた都作の仏像。</p> <p>わかさひめじんじゃ きゅうおにゅうじんじゃ しもしや <u>若狭姫神社(旧 遠敷神社・下社)</u>(県有形(建造物)) 奈良時代の遠敷には郡家が置かれ、郡の中心神として奈良の「お水取り」で有名な遠敷明神がまつられていた。同社には、いまも遠敷神社の額が伝わるが、その後二宮若狭姫神社となり、彦火火出見尊の妻である海神の娘、豊玉姫が祭神となった。</p> <p>しらいしじんじゃ う せ <u>白石神社・鵜の瀬(未指定(史跡))</u> 若狭一の宮の元宮・白石神社は、唐人の姿をした彦火火出見尊が垂迹したと伝わる地。東大寺初代別当良弁僧正の出身地とも伝えられる。「お水送り」において奈良に向けて香水が送られる地。若狭の食を育む豊かな水を象徴する地でもある。</p>	

			<p><u>若狭神宮寺(未指定(史跡))</u> <small>じんぐうじ</small> 和同 7 年(714)僧滑元の開創。若狭彦神の人身離脱により創建された寺院として『類聚国史』に記載がある。東大寺別当良弁の出身地とも伝えられるほか、「東大寺要録」の記録どおり、若狭の水を奈良東大寺二月堂に送る「送水神事」を続けており、また境内から平城宮第二次朝堂院様式の瓦が出土し、奈良と若狭の深い関係を顕著に示す寺院。<u>木造男神坐像・女神坐像(国重文(彫刻))</u>を祀っている。</p> <p><u>多田寺(未指定(史跡))</u> <small>ただじ</small> 天平勝宝元年(749)孝謙天皇の勅命により僧勝行が創建されたと伝えられる真言宗寺院。勝行は「東大寺三綱牒」にその名が見られ、奈良と若狭の関係の深さを示す。本尊<u>木造薬師如来立像と脇侍の木造十一面観音立像、木造観音菩薩立像(国重文(彫刻))</u>は、奈良～平安初期のもので都で技術を学んだ仏師の作。</p> <p><u>若狭国分寺(国史跡)</u> <small>こくぶんじ</small> 大同 2 年(807)創建。聖武天皇が諸国に建立した国分寺の一つ。所蔵する<u>木造薬師如来坐像(国重文(彫刻))</u>は、鎌倉時代の作。充実した体の表現と軽快な表現をみせる都伝来の作。</p> <p><u>小浴神社(若狭国惣社)(未指定(史跡))</u> <small>こみなみ そうじや</small> 惣社は平安時代後期に全国に建てられた神社で都との関係が最も強い神社である。小浴神社は、かつて「惣社」と呼ばれ、京の都から赴任する若狭国守に直接かかわる重要な神社であった。この神社に付属する八幡宮が、おそらく松永荘内にあった新八幡宮と考えられ、現在国宝に指定された絵巻群を伝えた神社として都の文化の伝播を顕著に示している。</p> <p><u>明通寺(未指定(史跡))</u> <small>みょうつうじ</small> 大同元年(806)、伏見宮領松永荘の中心地に開創された坂上田村麻呂創建と伝わる真言宗寺院。所蔵する<u>彦火火出見尊絵巻(県指定(絵画))</u> <small>ひこほほで みのみことえまき</small> は、若狭彦神社の主祭神・彦火火出見尊(山幸彦)と兄・海幸彦の神話を絵巻に表したもの。平安末期に後白河法皇が描かせ、若狭彦神社の所在する遠敷地区の新八幡宮に納めたと伝わる。現在は江戸時代に描かれた模本が別当寺である明通寺に所蔵されている。平安時代、宮廷の最先端の文化が若狭にもたらされていたことを伝える文化財。<u>本堂、三重塔(国宝(建造物))</u>は鎌倉時代の建立の県内最古の木造建造物。平安後期作の<u>木造薬師如来坐像、木造深沙大将立像、木造降三世明王立像(国重文(彫刻))</u>など貴族が帰依した中世密教寺院の様相を今に伝える。</p>	
--	--	--	--	--



	若狭の浦々に続く道 都の祭り・芸能を守り伝 える集落			
2 2	若狭の王の舞群 <small>おう まい</small>	国選択 他	<p>中世、都の大寺社で奉納されていた芸能(王の舞、田楽、獅子舞など)が若狭に伝わり、地域に根づいて伝承されている。多くが荘園鎮守社の祭礼として伝わっている。王の舞は、京都ではほとんど見られなくなっている。街道を通じてもたらされた都の文化が、若狭では独自の形で受け継がれている。</p> <p><u>宇波西神社の神事芸能(国選択、県無形民俗)(若狭町)</u> 宇波西神社の氏子集落は三方五湖の周囲に散在する。例祭には中世芸能の古態をよく残している王の舞、獅子舞、田楽が奉納される。春日社領耳西郷の鎮守社宇波西神社に伝わる。</p> <p><u>闇見神社例祭神事(県無形民俗)(若狭町)</u> 新日吉社領倉見荘の鎮守社闇見神社に伝わる。王の舞は子供が担当し、振り袖や女物の帯を使った衣装が特徴的。</p> <p><u>天満社例祭神事(県無形民俗)(若狭町)</u> 尊勝寺領藤井保の鎮守社天満社に伝わる。王の舞は12歳までの男子が赤い狩衣と袴を着て舞う。</p> <p><u>多由比神社の例祭神事(県無形民俗)(若狭町)</u> 大炊寮領田井保の鎮守社多由比神社に伝わる。三方湖を祭礼船で渡る年もある。王の舞、獅子舞、田楽のほかに、中世芸能細男(せいのお)が変形したエッサカエツトウも演じられるのは稀少。</p> <p><u>椎村神社の祭り(県無形民俗)(小浜市)</u> 小浜市若狭地区に伝わる芸能。小浜湾に面したわずか12戸ほどの集落が守り伝えてきた。戸主の年齢順にネギ、獅子舞、王の舞等の役を担当する。</p> <p><u>石くら神社の王の舞(町無形民俗)(若狭町)</u> 若狭町小原の石くら(木へんに安)神社に伝わる王の舞。小学校低学年の男子が唐草や鶴の模様の素襖と袴を着て舞う。</p> <p><u>広嶺神社の祇園祭(町無形民俗)(若狭町)</u> 若狭町日笠広嶺神社の祇園祭で舞われる王の舞は宮世話の大人が務め、法被を羽織って鼻高面を額に乗せ、鉾を神輿の四隅で突き上げる動作をする非常に簡単なものが伝わる。</p> <p><u>天神社の王の舞(未指定)(若狭町)</u> 仁和寺領藍田荘の鎮守社天神社に伝わる。10歳前後の男子が赤茶色の狩衣と袴を着て舞う。</p>	小浜市 若狭町

			<p><u>日枝神社の王の舞(未指定)(若狭町)</u> 若狭町麻生野日枝神社に伝わる王の舞。小学生の男子が白い狩衣と袴を着て舞う。</p> <p><u>国津神社の神事(県無形民俗)(若狭町)</u> 伊勢神宮領向笠御厨の鎮守社国津神社に伝わる。王の舞は若者が赤い狩衣と括袴を着て舞う。王の舞の途中から始まる田楽と田植の舞の演者は舞い終わると全速力で王の舞を突き倒しに行き、突き倒すことが出来たらその年は大豊作といわれる。</p> <p><u>能登神社の王の舞(未指定)(若狭町)</u> 新日吉社領倉見荘の鎮守社能登神社に伝わる。王の舞は12歳くらいまでの男子が、頭には色髪を髪のように長く垂らした独特の鳥甲をつけ、狩衣と括袴の下に女物の振袖、女物の帯をつけた独特の姿で舞う。</p> <p><u>天満宮の王の舞(未指定)(若狭町)</u> 若狭町海士坂天満宮に伝わる王の舞は小学生男子が、緋の着物に袴の姿で舞う。</p>	
23	若狭の六斎念仏群 <small>ろくさいねんぶつ</small>	国選択 他	<p>平安時代に京都で始まった六斎念仏が若狭に伝わり、現在でも20か所以上で行われている。鯖街道の終点、京都出町柳に干菜寺系六斎念仏の総本寺がある。若狭では街道沿いの集落から漁村にまで広く伝わっている。</p> <p>(主な六斎念仏)</p> <p><u>上中の六斎念仏(瓜生)(国選択、県無形民俗)(若狭町)</u> 若狭街道沿いの瓜生区に伝わる。鉦と太鼓と念仏に踊が加わる。</p> <p><u>上中の六斎念仏(三宅)(国選択、県無形民俗)(若狭町)</u> 若狭街道沿いの三宅区に伝わる。鉦と太鼓と念仏に踊が加わる。</p> <p><u>奈胡の六斎念仏(県無形民俗)(小浜市)</u> 小浜湾から山を隔てた奈胡地区に伝わる。集落で疫病がはやった時に、山の向こう側の漁村集落で行われていた六斎念仏を習い覚えて始めたと伝わる。</p> <p><u>奥窪谷の六斎念仏(県無形民俗)(小浜市)</u> 南川沿いの集落に伝わる。盆だけでなく毎14日の六斎日に行われている。8月と9月の六斎念仏は、子供は黄色い衣装をつけ、大人はひょっとこなどの面をつける。</p>	小浜市 若狭町
24	地蔵盆 <small>じぞうぼん</small>	未指定 (無形民俗)	<p>京都から伝わった地蔵盆の風習が市内各地に残っている。8月23日、24日子供たちが集落の祠の地蔵をきれいに洗い、絵の具で化粧を施して祀り、鉦をたたいて道行く人に参拝を呼びかける。</p>	小浜市 若狭町

25	まつあ 松上げ	市無形民俗	京都から伝わった盆行事の一つ。名田庄から南川沿いにかけて行われる。愛宕講の火伏せの祭りとして行われ、京都の愛宕神社からもらってきた種火を使う。	小浜市
26	わかさのうくらざ しんじのう 若狭能倉座の神事能	県無形民俗	若狭地方には中世の早い時期に猿楽(能)が存在し、大和猿楽など近畿地方の猿楽芸団とかかわりがあった。四座あったといわれる若狭の猿楽の中で「倉座」が発展し、変遷も経て現在まで続いている。江戸時代には藩主酒井氏の庇護を受け、若狭各地の多くの神社には能楽堂が建立され、神事芸能が奉納されてきた。	若狭町
27	みかたごこ 三方五湖	国名勝	<p>国名勝三方五湖は三方湖、水月湖、菅湖、久々子湖、日向湖の5つの湖とその周辺域、常神半島を含む若狭湾に面した海岸部から構成されている。海と繋がっている日向湖岸の日向浦や、常神半島の遊子、小川、神子(御賀尾)、常神は、鎌倉時代には漁業や製塩業、廻船業が盛んに行われ、海産物流通における大きな影響力を持っていた。これらの浦々から鯛やイワシ、アワビなどの海産物が「若狭の美物」として丹後街道を経由し若狭街道を使って都に送られていた。</p> <p>また久々子湖付近には、小浜の港が開発される以前、平安時代中期から鎌倉時代にかけての間、日本海航路の重要な港として利用されていた「気山津」があり、ここで荷揚げされた物資は若狭街道・熊川経由で都へと運ばれていた。</p> <p>さらに、江戸時代初期には三方五湖のうなぎは、「若州うなぎ」として京都で珍重されていた。江戸時代後期の記録には、熊川を通して京都まで、街道沿いの宿場に置かれた生簀を使って、生きたまま京に運ぶという画期的な物流が行われていた。</p>	若狭町
28	へしこ、なれずしの製作 ぎほう 技法	市無形 (工芸技術)	<p>へしことは魚の糠漬けのことで、その昔、魚の腐敗を防ぎ、長期保存するための保存食として作られている。江戸時代の中期には始まっていたと伝わる。</p> <p>平城京から出土した若狭発の木簡には「すし」と書かれたものが残っている。若狭では鯛などの魚介を、塩や麴により発酵させて保存する加工技術が古くから編み出された。そうした保存技術によって、かつて大漁にとれた鯖を無駄にしない食文化が現在も受け継がれている。</p>	小浜市



## 構成文化財の写真一覧

### 1 上中古墳群



### 4 熊川宿



### 2 岡津製塩遺跡



### (荻野家住宅)



### 3 鯖街道 (若狭街道)



### (旧逸見勘兵衛家住宅)



(熊川番所)



(御蔵道)



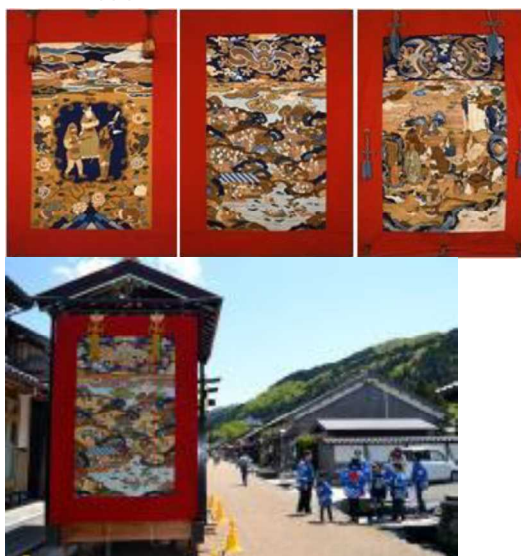
(得法寺)



(てっせん踊り)



(白石神社)



(熊川葛の製作技法)





5 三宅の火の見やぐら、火の見やぐら倉庫



7 小浜西組



6 瓜割の滝



(旧料亭酔月)



(旧料亭蓬嶋楼)



(旧旭座)



10 旧古河屋別邸、庭園



8 小浜市場



11 世界及日本図 八曲屏風



9 後瀬山城跡・同館跡



12 小浜の祇園祭礼群 (小浜放生祭)





(廣嶺神社の祇園祭)



13 和久里壬生狂言



(お城祭り)



14 若狭塗



(西津七年祭)



15 羽賀寺





16 本境寺



19 遠敷の町並み



17 鯖街道（針畑越え）



20 お水送り



18 上根来集落



21 遠敷の里の古代中世の社寺・仏像群  
(若狭彦神社)



若狭彦神社(上社)

詔戸次第



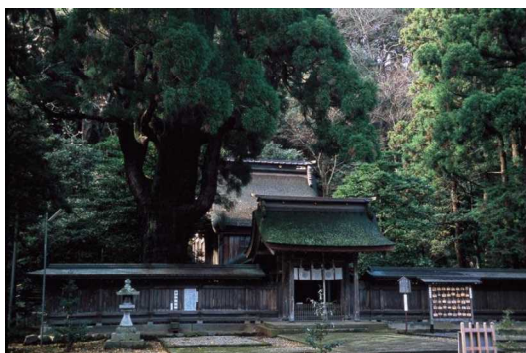
(竜前区 銅造薬師如来立像)



(若狭神宮寺)



(若狭姫神社)



(多田寺)



(白石神社・鵜の瀬)



鵜の瀬



白石神社

(若狭国分寺)





(小浴神社)



(間見神社例祭神事)



(明通寺)



(天満社例祭神事)



## 2.2 若狭の王の舞群 (宇波西神社の神事芸能)



(多由比神社の例祭神事)



(椎村神社の祭り)



(天神社の王の舞)



(石くら神社の王の舞)



(日枝神社の王の舞)



(広嶺神社の祇園祭)



(国津神社の神事)





(能登神社の王の舞)



(上中の六斎念仏 (三宅))



(天満宮の王の舞)



(奈胡の六斎念仏)



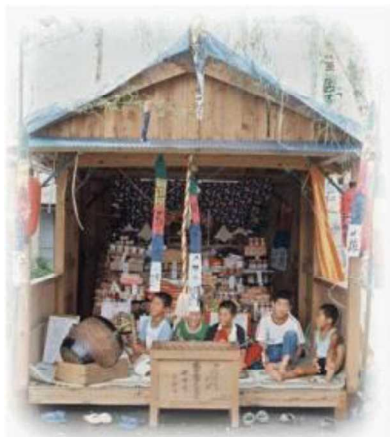
2 3 若狭の六斎念仏群  
(上中の六斎念仏 (瓜生))



(奥窪谷の六斎念仏)



2 4 地蔵盆



2 7 三方五湖



2 5 松上げ



2 8 ヘシこ、なれずしの製作技法



2 6 若狭能倉座の神事能

